

金色に輝く、白らやつ

綾瀬風



受賞のことは

多くの方が、大切に、慎重に、時間をかけて私の作品を読んでくださったこと。「コイツのことが良い」、「ここはダメだ」と深く選考を重ねてくださったこと。それらは、筆者としてこれ以上なく喜ばしいことです。選考委員の方々をはじめ、作品に触れてくださった全ての方に感謝申し上げます。今後また、作品を介して皆様とお会いできることを願っております。そのときは、どうか温かい眼差しで迎えてくださいませ。

プロフィール

アスクビクターモア、イクイノックス、バトルクライに魅せられている男。松山弘平騎手を応援している。近年は卓球を嗜んでおり、チーム名はステイゴールド。相手のユニフォームが青色だと、なぜか血がたぎる。

「もう野球やめたい…」

中学一年生の冬、僕は食卓に座る父の前でそう言って泣いてしまった。小学三年生のときに地域のクラブチームに入り、それからずっと野球を続けていたのだが、遂に「才能」というものを痛感してしまっただけだ。どれだけ練習しても上達しない。打球は遠くに飛ばないし、肩も弱く守備も下手。取り柄と言えば足の速さだけだったが、それも「才能」と呼べるほど突出したものではなかった。

「なんでやめたいんや?」

父はホットコーヒーを一口飲んで、僕の目をじつと見ろ。

「みんな練習して上手くななのに、僕だけ上手なれへん。打たれへんし、守られへんし、もう野球やっててもおもしろくないわ」

僕は声を震わせた。それを聞いた父は、残っていたコーヒーを一気に飲み干し、頭をかいた。そして、少しの沈黙の後、膝を叩いて立ち上がった。

「お前、馬好きか?」

父は目を腫らした僕に、突拍子もなく尋ねる。

「おんこのいう馬って競馬やろ…。全然わからんし興味ないわ」

深刻な悩みを打ち明けたのに、それを無視されたよう

な気がして、僕は機嫌悪く答えた。

「そうか、まあええ。ちよつとこつち来てみる」

父はそう言って、テレビのあるリビングへと僕を連れて行った。

テレビでは、馬が歩いている様子が映されていた。

「この中やったら、どの馬が好きや?」

テレビの前で父が言う。

「どれが強いかとか知らんし、全部一緒に見えるわ」

「強いか弱いかははどうでもええねん、良きそうやな思う馬を言うてみい」

僕は父を鬱陶しく思った。そのとき、テレビに白い毛

の馬が映し出された。

「じゃあこれ、この白いの」

他の馬と違う毛色が目に付いたというだけの理由で、

僕はその馬を選んだ。

「なかなか見る目あるやんけ」

父は笑いながら僕の背中を叩いた。このとき、僕は父のことが心底嫌いだと思った。

しばらくして、テレビからファンファーレが聞こえて

きた。

「もう走るぞ、よう見とけよ」

テレビの前に張り付いていた父はそう言って、僕を隣に座らせた。僕は、嫌々それに応じた。けれど、遅い体の馬たちが、次々にゲートへ入っていくのを見て、少しだけ興味が湧いてきた。全ての馬がゲートに入った後の一瞬の静寂。それに今まで感じたことのないようなドキドキを覚えた。

ガシャンと音がして馬たちが飛び出していく。僕はあの白い馬を探した。するとその馬は、先頭から大きく離された後方にいた。

「白いやつ、あかんやん」

後ろには大きく出遅れた一頭がいるだけのビリから二番目。それを見て僕は溜息がこぼれた。

「こつから、勝てると思うか?」

父はテレビを見たまま、真剣な声で僕に尋ねた。

「無理やろ、勝負にもならんちゃう」

僕もテレビを見たまま、嘲るように答えた。そう言った矢先、あの「白いやつ」は、出遅れた馬にも追い抜かれ、遂に最後方となってしまった。

「あーあ、ドベヤ。これはもうあかん」

僕はレースから目を離そうとした。すると、父がすぐさま僕に言った。

「まあ待てや、まだ勝負してへん」

父が何を言っているのかわからなかった。けれど、父はまだ真剣にレースを見ているので僕も仕方なく見ていると、「白いやつ」が外へ動いたのがわかった。その瞬間、父は僕の頭を掴んだ。

「さあこっからが勝負や、よう見とけよ！」

父が耳元で叫んだ。その叫びに反応するかのようになり、「白いやつ」が前の集団の中へ飛び込んでいった。

他の馬たちの外を走っていたため、白い体は見えなかった。けれど、オレンジ色の帽子と真っ赤な服を着た騎手が、先ほどまでとは明らかに違う速度で他の馬たちを追い抜いていく。

「画面の左、ご注目！ 四頭抜いた！ 一番外、芦毛が一頭、西日に映えます！」

実況の声を聞いて、僕はテレビの中の赤い服、そしてようやく顔を見せた「白いやつ」に釘付けになった。

向こう側からこちら側へ向かってカーブを曲がっていく。そして直線にさしかかったときには、人も馬も全力だった。騎手が前へ前へと手を動かす。白い体が懸命に走る。

「差せ！ 差せ！」

父は興奮のあまり立ち上がった。

「いけ、抜かせ！」

僕も思わず声が漏れた。けれど、順位はまだ集団の真ん中ぐらいだった。しかも、目の前には他の馬がいる。

「これじゃ抜けない！」

僕がそう言った瞬間、一際目立つ赤と白がスッと外側へと移動した。

「いける！」

父は何かを確信したかのように、拳を握って力強く言った。次の瞬間「白いやつ」はさらに加速した。集団のなかに埋もれていた赤い服が、どんどん鮮明になる。画

面に向かって、白い体がますます大きくなっていく。

「外から！ 外から！ ゴールドシップ！」

実況がこの日一番の声で叫ぶ。文字通り、突き抜けた。

「いけ！」

父と声が重なった。「白いやつ」は、さらに加速した。

そして、ついさっきまで追いかけていた馬たちに背を見せつけるようにして、ゴールに飛び込む。すぐさま騎手は左手を掲げた。

「ゴールドシップ！ 強い！」

実況の声とともに映し出された「白いやつ」は、さも当然だと言わんばかりに澄まし顔をしていた。

「すげえ」

このとき、僕も立ち上がった。

興奮のあまり動けないでいると、父は僕の肩を軽く叩いた。

「あそこからでも、勝てるんや」

「馬にはな、脚質いうんがあんねん。スタートから先頭を走るやつもおれば、良い位置とって先頭を狙うやつもおる。それだけやない。この白いやつみたいに、後ろから全員ぶち抜いたるいうやつもおるわけや」

いつもは聞き流す父の競馬話に、僕は聞き入っていた。

「だから出遅れたからといって、必ずしも勝負が決まるわけやない。走っても走っても、追いつかへんからといって、勝負できひんわけやない」

「お前のレースなんか、まだゲート出たばかりやんけ。それでちよつと後ろにおるからって諦めてたら、誰もお前の馬券なんか買わへんぞ」

「俺はどんなレースしようが、ちゃんとゴールまで帰ってくるなら、なんべんでもお前の馬券買うたる」

「競馬はギャンブルや。だから例え負けたくしても、それは馬の負けやなくて俺の負けや。馬はしつかりゴール

まで走りきったら、それでええねん」

父は僕の目を真っ直ぐ見て話し続ける。

「だからしつかりゴールまで走れ。お前の負けは俺が全部買うたる」

そう言って僕の坊主頭を撫でた。父の手は、とても大きくて温かかった。

「おとんは僕のこと馬やと思ってるんか」
撫でられているのが恥ずかしくなって、拗ねたような口調で言ってみる。それを聞いた父は少し慌てていた。

「例え話やがな！」

「話、下手やねん」

僕がツッコむと父は笑っていた。

「僕、やっぱり野球続けるわ」

「おう、怪我だけはすんなよ」

父は僕の背中をトントンと優しく叩いた。

「せや、これやるわ」

そう言って、小さな紙を僕に手渡した。それには、

「有馬記念13「ゴールドシップ」と書かれていた。

それから僕は中学卒業まで野球を続けた。足の速さを活かすために、右打ちではなく左打ちも練習した。そして守備では、肩の弱さを補うために、球の握り替えをひたすら磨き続けた。ユニフォームのポケットには、

あの日父に貰った馬券をお守りとして入れていた。そう

して、中学三年生のときに、大会の最優秀選手になった。結局、その大会で怪我をして野球をやめてしまったが、中学のチームを引退する日、父はとても誇らしそうにしていた。

「よう頑張ったな」

「僕にはゴールドシップの血が流れとるからな」

「なんやそれ、お前に流れとるのは俺の血や」

そう言って僕と父は二人で笑い合った。